様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５１０３６５

研究課題名（和文）１９７０年代タイ農民運動の農村における実態に関する研究

研究課題名（英文）Study on the grassroots situation of peasant movements in Thailand during the 1970s

研究代表者
重冨　真一（SHIGETOMI, Shinichi）

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：００４５０４６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：タイでは1970年代に活発な農民運動がおこった。これまで政府との交渉やバンコクでの集合行為については研究がなされてきたが、農村レベルの運動についてはほとんど記録がない。そこで本研究では、農民運動参加者や運動を支援した学生活動家から聞き取りすると同時に、当時の地方紙から実態を把握した。運動が活発だったのは、北部と中部地方である。北部では農民が村レベルで団結し、地主に地代引き下げを要求した。中部では地方レベルの農民リーダーをたよって広い範囲から農民が連携し、負債で喪失した土地の取り戻し運動をおこなった。いわば北部ではコミュニティ型、中部ではネットワーク型の運動が組織されていた。

研究成果の概要（英文）：Thailand experienced active farmers' movements in the 1970s. Although national level movements are well known, local level movements have been rarely documented. This study found events that happned in rural communities by interviewing movement participants, not only farmers but students who supported the movements, and reading regional newspapers. The movements were most actively organized in Northern and Central Thailand. In the North, farmers organizaed themselves at village level and demanded landlords to accept legally capped rate to rent. In the Cetral region, farmers built personal networks connecting to regional level leaders and demanded the government to help them to take back their farm land confiscated by money lenders.

研究分野：タイ地域研究

キーワード：農民運動　タイ地域研究　社会運動

１．研究開始当初の背景

タイの現代政治史に於いて 1970 年代はきわめて重要な時期である。それまで軍による権威主義的な政治が行われてきたのに対して、学生等が 1973 年に政治民主化を要求して大規模な集合行為をおこなった。その結果、軍部による政府が崩壊し、選挙や議会にもとづく政治が始まった。

こうした変化の中で、それまで声を上げることのなかった農民達も、自分たちの抱える経済的問題について訴え、状況の改善を求めて政策的な提案をするようになった。農民達は学生の支援を受けながら、1974 年 11 月にタイ国農民連盟という組織を作った。これはタイにおける初めての農民運動組織である。

農民達はバンコクにて数日間にわたる座り込み（集会）をおこない、彼らの要求の一部を政府に受諾させることに成功した。そのひとつが、水田地代管理法（以下、地代法と略）の公布である。この地代法によって、地代は収穫量の 3 分の 1 を上限とすることになり、それまで収穫物の半分を地代にとられていた北部の小作農にとって重要な成果であった。

しかし 1975 年の後半になると、タイの政治環境は変わっていく。再び軍部や右派の力が増していき、農民リーダー、とくに北部のリーダーがひとり、またひとりと暗殺されていった。1976 年 10 月のタマサート大学学生虐殺事件を契機に、軍部のクーデタが起こり、学生活動家とともに農民活動家も森に入り（共産党に合流し）非公然活動をする以外に道がなくなった。

このように 1970 年代の農民運動は、期間だけをみればたかだか 3 年ほどの間の出来事である。しかしこの運動は現代タイの政治史に於いて重要な意味をもつ。まず、先述のように、これはタイの農民が歴史上初めておこなった組織的政治運動であった。2 つ目に、それまで「声なき民」であった農民が政治的な要求を公然と行ったことの政治的社会的影響は大きかった。政治的経済的有力者は恐怖を感じたし、それが農民リーダーの暗殺事件につながったことは間違いない。政府もいったんは社会運動を抑圧したものの、力でおさえ続けることの限界を理解して、1980 年代には貧困農村地域での農村開発プログラムを国家政策として進めざるをえなかった。3 つ目には、この農民運動を闘い、のちに共産党に合流したもと活動家達のネットワークが現代にまで続いているということである。このネットワークをつかって北部では新しい農民運動組織が作られた。

1970 年代の農民運動は、タイの現代史を研究するものであれば誰もが知っている事実であり、上述したような中央レベルの運動についてはいくつかの先行研究がある。とりわけ Kanoksak の一連の研究（Kanoksak 1985; 1987）はこの運動をもっとも包括的に明らかにしたものである。Kanoksak の研究により、我々は運動の全体像や事件の流れを詳しく知ることができる。その他にも村嶋(1980)、Morell & Chai-anan（1981）、Luther（1978）らがこの社会運動を取り上げている。しかしながら農民達が自分の生産と生活の現場である地域社会で、どのように搾取者、抑圧者と対峙したのかについて明らかにしている研究はない。これは当時、農村に入ってこうした運動について研究することがかなり困難であったこと、また運動が鎮圧された後も関係者から聞き取ることが困難だったことがあろう。そうした調査が許される状況になった頃には、農村レベルの運動について研究上の関心が払われることがなくなってしまった。

しかし本研究を開始した 2012 年時点で、すでに運動当時の活動家は高齢になり、少なからぬ人たちが鬼籍に入っていた。当時の運動を、それに直接関わった人たちから聞き取ることのできる最後の機会であると判断した。

またタイは 2006 年以降、民衆の集合行為による政治混乱が続いている。こうした集合行為は 2000 年代の初めまでは都市中間層、知識人層をおもな担い手としていたが、2000 年代後半からは農村住民や都市下層の人々が政治的な社会運動に参入した。単純化を恐れずに言うならば、農村住民・都市下層の社会運動と都市中間層上層の社会運動とがぶつかり合って、政治混乱を引き起こしている。このように現代のタイ社会を理解する上で、社会運動の構造を分析することは鍵となる。

これらの背景から、本研究を提案するに至ったものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、1970 年代半ばに起きた農民運動の地域レベルでの実態を明らかにすることである。前項で述べたように、1970 年代の農民運動は持続期間は短かったものの、タイの現代政治史にもつ意味は大きい。中央レベルでの集合行為や運動全体の動向についての研究はあるものの、地域レベルでどのような運動が組織されたのかについてはほとんど記録がなされていないのが現状である。そこでかつて運動に加わった農民・学生やそれを間近で観察していた人たちから聞き取りし、運動の推移、組織形態、リーダーシップ、帰結を明らかにする。

３．研究の方法

（１）インタビュー調査

1970 年代半ばの農民運動参加者からの聞き取り調査をおこなう。しかし当時から 30 年がたっている状況であるため、まず誰が「参加者」なのか、どこにいるのかを特定することから始めねばならなかった。

北部については、運動の支援をした当時の学生達が現在もネットワークを保っていることが分かった。そこでそのネットワーク内

にいて連絡役的な存在の人物にインタビューし、運動に参加した学生のリストを作った。次にそのネットワークを利用して、当時の農民で運動に参加した人を探した。これは調査のベースとなるものであるため、初年度に北部タイを中心に活動しているNGO活動家にリスト作成を委託した。このようにしてできた2つのリスト（もと学生活動家リストともと農民活動家のリスト）にもとづいてリストされた人物にインタビューをしていった。インタビューの中で知り得た人物をこのリストに加えていった。

この中で、ランプーン県のシンチャイ・タマピンという農民がかつて村レベルのリーダーであり、かつ1990年代以降の北部農民運動のリーダーでもあるということがわかった。そこでシンチャイ氏と氏が運動をおこなった村（ランプーン県ムアン郡トントン区サンマナ村）の関係者から詳しい聞き取りをした。

まずシンチャイ氏については、氏の子ども時代からの経歴、農民運動がこの村で始まる経緯、村人の経済社会関係、運動の展開、運動組織などについて詳しい聞き取りをおこなった。また同村の他の住民については、運動に参加した人、運動の反対者に近い立場だった人、当時の村長などから話を聞いた。村の現在の経済社会構造についても、現在の住民リーダーや地方自治体から情報を集めた。

農民運動を支援した当時の学生活動家については、リストの中から主要な人物すべてに聞き取りをした。

一方、中部については当時の運動参加者の特定に困難を極めた。北部と違って支援に入った学生のネットワークができていない（インフォーマルなものはあるようだが、公然化されていない）。農民リーダーの名前は新聞などに出てくるが、そのほとんどがすでに鬼籍に入っていた。そのため、かつて農民運動が盛んだった地域に行き、そのエリアで現在活動しているNGOなどから、かつてのことを知っている人、あるいはかつて活動していたと噂される人を教えてもらい、その人を訪ねるという方法をとった。またかつての学生活動家に当時中部タイ農村に入った学生を知らないか聞いてまわった。このような「犬も歩けば棒に当たる」風の調査をしている中で、ようやく当時タマサート大学で学生の農民支援を指揮していた人物に出会うことができた。この人物から紹介された何人かのもと学生活動家から、当時の様子を聞き取った。農村部でも当時のことを記憶している人が何人か見つかったので、そこでも聞き取りをおこなった。

このように当時の農民運動に参加した総数に比して、本研究で聞き取りができた件数はきわめて限られていると言わざるを得ない。しかし調査の制約は、研究開始時に予想したものを遙かに超えていた。

（２）文献調査

インタビュー調査の限界を補足するために、当時の新聞記事から出来事の推移、経緯を把握するよう努力した。農村レベルの活動を知るためには、地方紙が重要である。そこで国立図書館とチェンマイ大学図書館に所蔵されている地方紙の現物、マイクロフィルムを閲覧した。残念ながら国立図書館の新聞は、欠号が多く、カタログ上にある新聞の現物がないとい状況で、ほとんどデータを得ることができなかった。このため、中部タイで発行された1970年代半ばの地方紙を見ることができなかったのは本調査の上で大きな痛手であった。

チェンマイ大学図書館の方は、1970年代に北部で発行された新聞が何種類かマイクロフィルムとして残されていた。このマイクロフィルムを丹念に読むことで、いつ、どこで、どのような事件が起きたのかが、かなり分かった。聞き取り調査で聞いた話が、新聞にも登場するので、聞き取りでは確認できなかった年月日や人物名も確認できた。

これら地方紙の他に、タマサート大学に残されていた*Prachathipatai*（民主主義）という全国紙（実際にはバンコク周辺のみで読まれていたものと思われる）を読んだ。この新聞にはかなりの学生運動、農民運動の記事がある。地方の状況についての記事は限られているが、学生による民主主義普及事業など学生運動関連の記事の中に地方の状況が見て取れる。ただし本紙はまだ全部を読み終えていない状態である。

４．研究成果

1970年代半ばの農民運動は、主に北部と中部で闘われた。これは当時の新聞記事に登場する「事件」やバンコクの集会に出てくる農民の出身地から明らかである。東北地方や南部にも運動はあったが、そのボリュームからすると、やはり北部と中部に焦点を当てざるをえない。

しかしこの2つの地域はその社会経済的属性が大きく異なる。北部はラーオ系タイ族の住民が住むエリアで、言語や食文化もラーオ系のものである。山地が多く、山に囲まれて平地がある。一方、中部はシャム系タイ族のエリアで、チャオプラヤー川水系に広大な平原が広がる。このように自然環境と社会経済環境が異なるため、同じ時期に展開した農民運動でありながら、この2つの地域はまったく異なった様相を、この農民運動はとった。そこで以下では、北部と中部に分けて、農民運動の展開と組織について明らかになったことを述べていく。

（１） 北部

北部の農民運動の要求内容は大別すると①地代引き下げ、②土地権の獲得、③農産物価格保障、である。①と③は主にチェンマイ・ランプーン盆地の平地部で、②その周辺

や山間部で、おもに闘われた。
まず①の地代引き下げ闘争は、チェンマイ県、ランプーン県の多くの村で闘われた。もともと北部は人口に対して平地が少なく、一個あたりの農地が狭小である。またこのエリアはもともとランナー王朝があり、その王族貴族に連なる家系が土地を権力的に取得してきた。一方で、均分相続慣行による土地の細分化と商業的な農業の浸透による農民層分解が加わって、地主制が発達した。そこでの地代は収穫物折半であった。
1973 年 10 月の学生による軍事政権打倒を受けて、農民達は自分たちの貧困状況を学生に相談した。そのようにして外部の情報を得る中で、じつは 1950 年代に地代法が施行され、それは地代を 3 分の 1 に制限していること、ただしその適用は中部地方に留まっていること、などを学んだ。そして農民と学生達は、この地代法を北部にも適用するものに変えるよう政府に要求した。中央レベルの運動が稔り、1975 年 12 月にこの地代法が成立する。新地代法は雨季作の場合、地代 3 分の 1、同じ小作人が乾季作をする場合は地代なしと定めていた。
それを受けて、農民達は自分の地元で地主と直接対峙した。従来の地代（折半）を要求する地主に対して、小作農は法定の籾だけを水田に残して、あとは自分の家に持ち帰るという、いわば実力行使で対抗したのである。北部の農民達は近隣親戚同士で農作業を助け合う習慣（ロンケーク）を持っている。稲刈りも運動参加者がこのロンケークを使っておこない、刈り取り、脱穀が済んで籾が水田に積み上げられたところで、その場に来た地主やその差配に対して、新しくできた地代法の条文を読み聞かせたという。筆者が実態を詳しく聞き取ったサンマナ村の場合でいうと、この村の小作農達が最初にこの闘争を行ったのは 1976 年の乾季作であったので、法律条文を読んで収穫物を全部持ち帰ったという。地主は怒って、暴力行為を示唆するような脅しをかけた。
このように中央レベルでの闘争の成果は、地域社会レベルでの集合行為がない限り実効性を持ち得ず、それを可能にしたのは北部農村住民の伝統的な連帯性であった。実際、農民運動の活動組織は各村レベルに作られていた。サンマナ村の場合も、シンチャイ翁をリーダーとして、サンマナ村農民連盟という組織名称をもっていた。
こうした社会関係を基盤にして運動組織ができているため、闘争のやり方にも社会関係が色濃く反映する。サンマナ村の場合、中心的な運動を担ったグループは、ほぼ親戚、姻戚関係でつながっていた。また地代引き下げを要求した相手の地主も、特定の地主であった。その地主はもと王族関係者の末裔で、小作に対する温情もない態度をとってきた人物であった。その地主の兄弟にあたる地主は、小作人に温情をもって接していたため、地代引き下げ闘争の対象にはならなかった。このことから、地代引き下げ闘争が単純な経済闘争、階級闘争ではなかったことがわかる。
②の土地権に関わる闘争は、森林や鉱山のコンセッションを企業や政府機関が得たために周辺住民の生活が脅かされた場合に発生した。ランパーンのメーリアン周辺村で起きた事件はこの典型例である。鉱物資源の採掘によって水源が汚染されるなどした地域農民は、鉱山への道を封鎖するなどの実力行使にでた。鉱山事業者と農民の双方が武器を持った衝突にまで発展した。この場合でも、農民は地域で連帯して運動組織を形成し、工場や政府と闘った。
③の事例は商品作物のエリアで起きたものである。当時、乾季になるとタバコを栽培する地域がかなりあった。ところがタバコ葉の加工工場は地域独占であって、農民側に価格交渉力がなかった。そのため長年価格が据え置かれていた。この状況を変えようと、タバコ栽培農民が組織を作り、買い取り価格の引き上げ交渉をおこなった。この場合は村レベルよりも広い範囲で運動の参加者があったようだ。しかしそれでも地域社会が組織基盤になっているという点は同じである。

（２） 中部
中部の農民運動は北部のそれと大きく組織形態が異なる。まず地域社会で運動を組織するというケースが希であった。多くの場合、地方レベルのリーダーに、問題を抱えた農民が相談に行き、そうしてできたネットワークを使って、バンコクでの集合行為への動員をかける、というものだった。
こうした運動組織形態の違いが出るのは、中部地方の農民が抱える問題が北部とかなり違っているということも影響している。この地方では農民が借金のかたに所有農地を商人や金貸しに差し押さえられ、ついには所有権を移転させられるという問題が起きていた。問題を抱えた農民が同じ地域に集中しているわけではなく、しかも個々の農民によって借金の状況や経緯、返済条件がことなる。さらに中部地方は、北部と異なり村レベルのまとまりが希薄である。村が集村ではなく、列状村や散村になっている地域も多く、人々のまとまり意識は村よりも寺をセンターとして作られている。ひとつの寺に通う人は複数の村や行政区域に広がっている。このような状況で、農民が地域的な連帯をするのは難しい。
支援に入った学生活動家も、地域社会での組織化には大きな困難を感じていた。結局彼らは、地方リーダーのところに付いて、リーダーとバンコク（学生のセンター）をつなぐ役割を果たしただけであった。
農民リーダー達は、いろいろな地域の農民の苦情をとりまとめて陳情する（あるいはそれらをもとに政府と交渉する）存在であったから、階級闘争という性格からはほど遠いも

のであった。農民リーダーへの暴力的攻撃が始まった後、中部のリーダーはあまり暗殺されていないのは、こうした事情も反映しているのであろう。

このようにネットワーク型の社会運動組織が中部タイにおける農民運動を特徴付けている。もちろん例外はあって、ナコンサワン県のタータコー郡では、リーダーが地域の農民をまとめている（村嶋 1980）。しかしこの場合でも、地域社会レベルで金貸し相手の闘争があったわけではなく、あくまでもバンコクで政府に陳情するという形を取っている。

[引用文献]

Kanoksak Kaewthep (1985). "The political economy of modern Thai peasant movemnet: A case of the Farmers' Federation of Thailand (FFT), 1973-1976," Paper No.2805, Faculty of Economics, Chulalongkorn University.

_____ (1987). *Bot wikhro sahaphan chao na chao rai haeng prathet thai: sethasat kan muang wa duai chao na samai mai.*(タイ農民連盟の分析―現代農民の政治経済学). Bangkok: CUSRI Publication.

Luther, Hans U.(1978). *Peasants and State in Contemporary Thailand: From Regional Revolt to National Revolution?* Hamburg: Institute fur Asienkunde.

Morell, David and Chai-anan Samudavanija (1981). *Political Conflict in Thailand: Reform, Reaction, Revolution*. Cambridge, Mass.: Oelgeschlager, Gunn & Hain, Publishers Inc.

村嶋英治(1980).「70年代におけるタイ農民運動の展開―タイ農民の政治関与と政治構造―」『アジア経済』21巻2号: 2-31.

５．主な発表論文等

〔図書〕（計　１件）

① Singchai Thammaphin, Shinichi Shigetomi, and Attachak Sathayanurak, Blooming Creation, *Tosu phua aria*. (何のために闘うのか), 2017. 80頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

重冨真一（SHIGETOMI, Shinichi）
明治学院大学・国際学部・教授
研究者番号：00450461